

4. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その19)】

泡と消えたキヨヒメクラゲ

2004年2月初旬、400個体余りのクシクラゲ類が瀬戸漁港に吹き寄せられていた。最も驚いたのは64年ぶりに出現した「清姫水母」だった。実物を見るのは今回が初めてで、現在、世界で確認されているのは2種だけである。体の先端に三角状の突起があるのが特徴で、とても扁平で大形のクシクラゲである。

キヨヒメクラゲは、京都大学瀬戸臨海実験所の近くの海で捕獲された個体を基に、同実験所の時岡 隆先生が駒井 卓先生と共著で1940年に新科新属新種として記載した風変わった種である(図)。だが、それ以降はぷつぷつと記録が途絶えたままである。その形状が、

"情熱の炎を吐きながら安珍を追う清姫のようだ"、と思いつかれた駒井先生が名付けられたとのことである。今回の発見も時岡先生が記録された採集時の生き生きとした様子やその形状のスケッチがあったからこそ可能となったのである。

最近、深海艇を駆使した研究によって、わが国やアメリカ側の太平洋の深所に、キヨヒメクラゲ類が潜んでいることがわかったのも驚くべき発見だった。小生は、「しんかい2000」が耐用年数を終える直前に、数度、相模湾や駿河湾の1500m以上の深海底までクラゲ類を観察しながら何度も潜航したが、残念ながらキヨヒメクラゲ類とは遭遇できなかった。個体数は多くないのかもしれない。

白浜町の瀬戸漁港に現れたキヨヒメクラゲは、直径12 cmの柄杓より大きかった。引き潮になっていく10時すぎの遭遇だったため、潮位がどんどん下がり、うまく取り込めたと思ったのもつかの間、柄杓を動かしたときの水流か、はみ出たのが災いしたのか、幻を見たかのように姿が見えなくなってしまった。世界で2回目となる捕獲に失敗し、世紀の大発見は泡と消えてしまったのだ。

この個体は、想像するに、深みから冷水塊にのって浮上してきたものの、弱っていたのでこの不運が重なった。キヨヒメクラゲの原記載には、「極めて脆弱」と記されている。とても脆弱なツノクラゲよりもさらに壊れやすいのだろうか？ただし、時岡先生が、1939-1940年の冬季に複数の標本を採集したとも記してあった。再び出会える日を心待ちにしているのだが、この原稿を書いている2012年1月中旬まで二度と姿を見せてはくれない。情念の強い名前とは裏腹に、ひっそりとした所で暮らしているのだろうか？



しかし、驚いたことに、近年になって長崎県佐世保市沿岸でキヨヒメクラゲが、複数、何年にもわたって冬季に決まって海面付近に出現している（図）。不

思議なことに、世界でここだけで何度も姿をみせている貴重な海域なのである。毎年、九十九島水族館で飼育展示されるのでその姿がめでられる。

図. 白浜産の個体を基に新科新属新種として記載されたキヨヒメクラゲの最大個体(画像は長崎県佐世保産のものでスケールは 1 cm)